

# オウム対策住民協議会ニュース

烏山地域オウム  
真理教(現アレフ)  
対策住民協議会

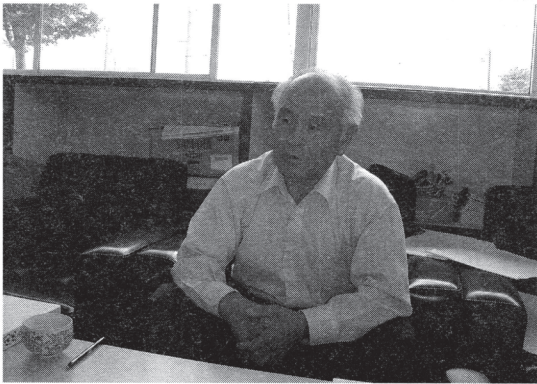
## あの時を忘れない Vol.5 オウムとの死闘、上九一色村

富士山裾野の広大な牧草地帯。北海道の富良野かと錯覚してしまうほどの、どかな大自然が広がっていた。富士山の雄姿を目の当たりにした草原で、牛が牧草を食んでいた。山梨県の上九一色村富士ヶ嶺地区。一九八九年七月、この地にオウムが進出を始めた。最初は六、七人だった、と対策委員会の副委員長として住民の先頭に立って死闘を続け、現在も村議会議員を勤める竹内精一さんが話し始めた。進出から八年、オウムは深夜の工事、騒音、廃液の流出、公道の独占、脅迫、電話盗聴、住民の監禁など数限りない法令違反・不法行為をやってきた。そのオウムも一九九六年十一月一日、荒木(当時広報副部長)の移転を最後に完全に撤退した。

今年四月二十三日の烏山住民対策協議会主催の学習会で、講師の桜井義秀・北大大学院教授は「出来る限り情報を流しつづけ、オウム事件を風化させないことだ」と強調した。オウム真理教がこの地で何をしていたのか、上九一色村住民の熾烈な戦いの実態を改めて明らかにし、今また麻原教祖への回帰傾向を強めるオウム真理教の恐ろしさを思い起こしたい。以下は以前の静けさを取り戻した、上九一色村の取材報告である。

### 八九年七月に進出開始

第一サティアンと第四サティアンは富士宮総本部で、上九一色村では第二サティアンから。最初は六、七人がコンテナを持ち込んで原野に寝泊まりするといった形だった。衆院選惨敗後の九〇年四月頃から、土地取得と無許可の造成基礎工事が始まった。正体不明の廃液を垂れ流し、異臭が発生、牧草が枯れはじめた。富士ヶ嶺オウム追放住民大会が開かれたのが九〇年五月二七日。六月が十九人、七月に十四人が転入届を提出した。転入届けの件では村は立入調査しようとしたが拒否された。後で考えると、このころ建物の中で細菌の培養をしていたのだ。七月二十一日にオウムは転入届不受理で村長を職権濫用で提訴。九月にオウム追放村民大会を開催し、監視小屋に電気を



富士ヶ嶺オウム真理教対策協議会 副委員長 竹内精一氏

引いた。オウムは輪転機を持ち込み、車で印刷用紙を大量に運び込んだ。この頃は警察も行政も手をこまねいていた。

### 座り込みに「轢き殺すぞ」

サティアン建設に対して建材業者に資材を売らないように要請した。都留土木事務所が工事中止と変更申請を指導したが、オウムは工事を続行した。工事の中止を申し入れ、二〇人の村民が道路に座り込んで生コン搬入阻止の実力行使をした。「轢き殺すぞ」「轢くなら轢いてみる」こんなやり取りを繰り返した。しかし、この時はあろうことか村民が機動隊に排除された。九一年四月の審尋で、住民の「騒音、振動など被害があり、住民が撮影されたり、尾行されたりして不安だ」と訴えたが、地裁は「被害は抽象的で科学的に立証されない」と取り上げなかった。九〇年五月に転入届けは受理され、六月に建物は実質上完成、新たに土地取得の動きがあり、都内に住む地主に売らないように頼んだが、受け入れられなかった。当時の富士ヶ嶺地区の住民は七百人、オウムの居住者はピーク時で八百人ほどだった。

### 身の危険は常に感じていた

戦いが激しかったのは九〇〇九五年の五年間。マントラの音は半径一キロぐらいい聞こえた。その度に抗議した。夜中に住民が寝静まった頃に岩盤を叩いて工事する。夜中の十二時に村民から「オウムが火を燃して煙たたくて困っている、助けて」と電話があり駆けつけたこともあった。警察に連絡しても二時間も来ない。私一人で七、八人の若い信者と渡り合っていた。投光機で照らされ、一人石を持って対抗、「もう一度照らしてみろ、人には投げないが投光機をぶち壊すぞ」と叫んだ。「煙つたい、と苦情がきている」というと「あれは霧だ」「霧かどうか一緒に確かめよう」と言っても応じなかった。この時は本当に身の危険を感じた。実際恐ろしかった。施設内には誰も入れなかった。第七サティアンの中は凄惨なものだった。密かに塀の下からもぐり込んだ瞬間息を飲んだ。我々も常に注意していたのに、こんな資材を何時持ち込んで

だのか。私たちが側を通ると見張りがすぐシャッターを閉めた。すぐ隣の第九、第十一が兵器工場だった。

### オウムが買ったのは離農者の土地

上九一色村は人口千七百人余、うち富士ヶ嶺地区は七百人。ここは戦後の昭和二〇年以降に隣の鳴沢村や道志村、長野県の下伊那から入植した人たちの開拓地だった。満州からの引揚者で、ほとんどが酪農農家。土地は溶岩の上なので肥沃ではない。麻原がここを選んだのは、土地が安いこと、山梨・静岡の県境だったこと。村の人口が少ないし、県境は警察力が及びにくかった。富沢村も熊本県の波野村も同じ条件だった。オウムが買った土地はみんな離農した県外の方が所有する土地で、地元の人が売った土地はない。オウムが土地を取得するらしいと噂がある度に地主である県外の人の家に「売らないように」と交渉に出掛けた。

### 信者との対話を大事に

戦いの最中に私はオウム信者と何回も対話した。夜中でも出向いて「あなた達のやっていることは間違っている、親だっで心配している、家に帰りなさい」と説得した。彼らの社会復帰は、働く所も大変だし、前歴も関係してなかなか採用してもらえない。このことは今後社会が一体となって考えてあげなければいけない。まづ家に帰らせる。家には親も近所の知人や友達もいる。その人たちに自分が正しいと思えば伝える。その過程で信者自身がおウムについて疑問を持ってもらえばいいじゃないかと。教団の信者の対応は一層激しくなっていた。信者を集団で隔離して、外からの影響を遮断して洗脳すれば、早く洗脳出来る。九二年七月に女性信者が脱出したが、結局連れ戻された。八月には子供の「助けて」という声も聞いた。九四年には脱出者が頻繁になり、両親の信者探しも活発になった。修行はすいもので、トイレだって修行すれば我慢出来る、蓮華座を何時間もする。立ち礼拝を繰り返す、普通の人、坊さんだって無理です。対策委員幹部の家やここ(取材で訪れた公民館)にも盗聴器が付けられた。屋外のボックスに付け、離れた所に受信機を置いて録音する、という方法だった。

われわれは最初から覚悟を決めていた。一年や二年で解決しない。息長くやるしかない。基本的にどんな団体からでも応援をして貰いましょう。ただ、右翼と極左集団は外そう、と話し合った。ヤクザも来た。私が出向いて「大変有り難いが、地元だけでやる決意です。何かあった時は宜しくお願います」と、了解してもらった。長引くと、覚めてきたり、諦めが出たりする。必然的なことだ。この場合は行政がはじめから、あまり相手にしない、という態度だった。県のあらゆる機関に陳情に歩いた。人権擁護委員会、県議会や各政党、土木事務所、保健所などを回った。警察や行政が動いたのは強制捜査後だった。主体はここ富士ヶ嶺地区だった。地区内でも問題が発生したサティアンの近辺は燃えるが、他の地区は引いてしまう。だからその当時は他地区のひとでも出来るだけ回り道をしてでも、サティアン近辺を通ってくれ、と頼んだ。それが応援になるから、と説得した。

公民館での会談後、竹内さんの自宅の縁側で、当時の抱えるほどの写真や資料を見せていただき、車でサティアン跡を案内していただいた。いまはまったく跡形もなく牧草が生い茂っていた。麻原の執務室があった第二サティアン跡は村営の公園になつて休憩小屋があり、近くに名もない慰霊塔が建てられていた。植樹したばかりの苗木が初夏の陽を浴びて根付き始めていた。それまで雲に隠れていた富士山がクツキリと頭を出した。とても印象的な景色を後に帰路についた。



富士山を望む第7サティアン跡

## オウム真理教解散、解体の闘いの為の募金活動のよびかけ

オウム真理教対策住民協議会の活動も、3年半を経過しようとしています。

オウム真理教が烏山地域に居住するようになった2000年12月、多くの住民は「オウムは出ていけ」「オウムは解散しろ」と声をあげました。運動も署名・抗議行動と大変盛り上がり、募金も住民の皆様のご協力で、沢山集まりました。

しかし、3年半を経過した現在は、募金のご協力は年々減少してきています。協議会の活動資金は、住民の皆様のご協力が唯一の手段です。

この記事が書かれている協議会ニュースも、協議会の活動資金で毎月発行する事が出来ます。

今後、オウム真理教との闘いがどのぐらいの期間になるのか想像できませんが、皆様のご支援を頂きながら続けていきます。

**多くの住民の皆様に募金のご協力を呼びかけます。**

**一緒にオウム真理教の解散、解体まで闘いましょう。**

ご家族で「オウム真理教と闘う募金箱」など、作っていただく。又、商店の皆様には店頭におつりを入れてもらう募金箱を置くなど、様々な方法があります。

ご協力いただける方は、郵便振込みをご利用ください。

●振込先 烏山地域オウム真理教(現アレフ)対策住民協議会  
口座番号 00170-1-662133

## 監視小屋だより

オウム真理教が烏山に居住して3年半が経とうとしています。この間住民協議会は協議会ニュースの発行・抗議デモと学習会・監視活動・署名運動・募金のお願ひ等の活動をしていますが、その中で監視小屋での監視は毎日、地域住民の皆さん(現在は24団体)が、交代で行っています。地道な活動ではありますが、常に住民の目があるということはオウム信者に対して、かなりの圧力になっていると思われます。

### (平成15年12月～平成16年3月) 監視小屋日誌より

この日誌は、毎日時間を追って信者の行動・服装・持ち物・車の出入り等、詳細に記入されています。

- ◇ 居住してきた頃よりきちんとした服装で出かける信者が増え、一見して信者なのか見分けがつかない。
- ◇ GSハイムとサンサンマンションの往来が多い。テレビ・家具等、大きなものを台車で運んでいた。
- ◇ ワゴン車でサンサンマンションに食料の搬入をしていた。(段ボール箱にバナナ5ケース、豆腐3ケース、パン3ケース)
- ◇ 報道関係の人にいろいろと感想を求められ、住民協議会が活動していることを話した。
- ◇ 取材を受けて困った。
- ◇ 出家信者は若者が多いと思っていたが、50歳代と見られる信者も何人かいる様子。
- ◇ 大家が立ち寄り、これからもオウム信者を支援し、住居も提供したい旨の発言。もうたくさん、これ以上絶対に居住させないでほしい!と、監視活動を通して痛感しています。

2月には麻原彰晃の第一審が終り、死刑の判決が下されました。当日は公安調査庁をはじめテレビ・新聞など報道関係者の数も多く、監視小屋もいつになく緊張した空気に包まれていましたが、懸念されたような信者たちの動きは

ありませんでした。もちろん住民協議会としてもいつもより監視の人数を増やして備えました。

住民協議会の中心活動は地域住民による監視です。烏山が安全で安心な町になるまで手を緩めることなく続けていきます。地域の皆さまも監視活動をしている住民協議会の人達をみかけたら激励して下さい。

### 5月12日 監視小屋日誌より

- PM2:00～4:00 いつも通り日誌書入れをはじめ。
  - ◇ GSマンションより若い男性がサンサンマンションへ軽く挨拶して通る。耳にはイヤホンをつけている。ヘッドギアの替わりなのか?
  - ◇ 若い女性が出かける。大きな荷物を持って、見るからに信者とおぼしき清潔感のない服装をしている。
  - ◇ 年配の男性がサンサンマンションからGSマンションへ。いくつ位なのか、50代は過ぎているように見える。
  - ◇ 車が入って来る。大きなコンテナである。しばらく間をおいて運転していた若いとはいえない女性信者が台車を持ってコンテナから荷物を積み出す。荷物は、パン・バナナ・豆乳など食料品をサンサンマンションへ運ぶ。
  - ◇ ネクタイに背広姿の若い男性がカバンを持って帰ってきた。GSマンションへ。
- 2時間のあいだ、GSマンションとサンサンマンションを行ききする信者の数は多い。外出する信者も午後の時間帯は少なく、朝出かけると帰るのは夕方なのだろうか。他に仕事持つ信者が多くなったという事を裏付けているようだ。

一般的に服装はバラバラ、顔の表情もあまりなく、挨拶は気軽にする様子。何か話しかけたい雰囲気もある。

## 住民協議会活動報告

5月28日(金) 広報部・上九一色村取材活動  
6月2日(水) 事務局会議  
6月5日(土) 署名・募金街頭活動  
6月7日(月) 広報部会「協議会ニュース」37号初校正

6月14日(月) 広報部会「協議会ニュース」37号再校正  
6月18日(金) 住民協議会総会  
6月20日(日) 署名・募金街頭活動  
6月21日(月) 「協議会ニュース」37号発行

協議会ホームページアドレス <http://www.kyogikai.jp>

この協議会ニュースは、皆様のご協力で発行されています。